



宮農情報



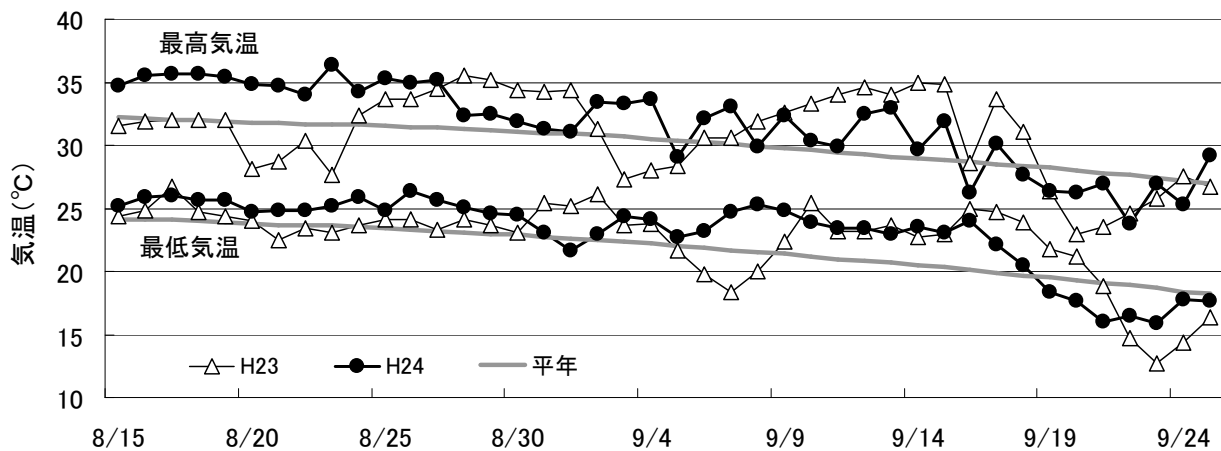
「あまおう」10月の管理

第5号 平成24年10月9日

南筑後普及指導センター
福岡大城農業協同組合

今年は、8月から9月中旬にかけて最高・最低気温が高かったものの、苗質がやや小ぶりであったこともあり、夜冷・株冷ともに花芽は順調～早めに分化しました。

普通ポットについては、高温が続き花芽の動きだしは昨年よりも遅くなりましたが、9月後半には気温が急激に低下し、一斉に花芽分化が進んでいる状況です。



〈8/15～9/25の最高・最低気温(アメダス久留米より)〉

今後の管理

早期作型は、定植後好天に恵まれ、活着が良く順調に出葉しています。草勢が旺盛すぎる場合、2番花房の分化が遅れやすくなりますので、寒冷紗被覆など2番花房の早期分化に向けた対策が必要です。逆に、普通ポットは、昨年よりも定植が遅くなったところが多いようですので、生育が遅れないように注意して下さい。

草勢の判断の目安（早期作型）

10月上旬の最大葉長（定植後出葉した中で最も大きい葉）を測定する。



最大葉の縦長を計測する



○草勢が旺盛な場合（最大葉長9cm以上）

2番果房の分化を促進させるため、草勢を抑える管理を行う

- ・ 寒冷紗を被覆する
- ・ マルチやビニル被覆を遅らせる（マルチしている場合は裾を畝の肩まで上げる）

○草勢が抑制されている場合（最大葉長8cm以下）

2番花房は分化しやすいため、株の生育促進を図り、厳寒期に向けた株作りを図る。

- ・ マルチやビニル被覆を早め、やや高めの温度管理をする

かん水

- ・ 活着までは、畝の表面が乾燥しないように十分かん水し、活着後は、ハウス内で作業が行えるようにかん水量をやや控える。
- ・ 草勢が旺盛で葉色が濃い場合、かん水量を控え（pF値の目安2.0）肥効抑制を図る。
- ・ 生育が抑制されている場合、十分にかん水を行い、乾燥しすぎないように注意する。

寒冷紗被覆

- ・ 2番花房の分化促進のため、9月末頃から10月20日まで寒冷紗を被覆する。
- ・ 天候によっては軟弱徒長しやすいため、通気性を十分に確保する。
- ・ ほ場が乾きにくくなるため、かん水の回数や量を調整し、適湿を保つ。
- ・ 軟弱な生育になるとうどんこ病の発生が多くなるため、予防防除を徹底する。

寒冷紗の種類	遮光率
シルバー寒冷紗109番	39%程度
黒寒冷紗600番	51%程度
黒寒冷紗610番	58%程度

下葉除去・どろ芽除去

- ・ マルチ前に下葉・どろ芽を除去し、マルチ時の葉数が4～5枚になるようにする。
- ・ 摘葉直後は、必ず「炭そ病」「ダニ」の防除を実施する。

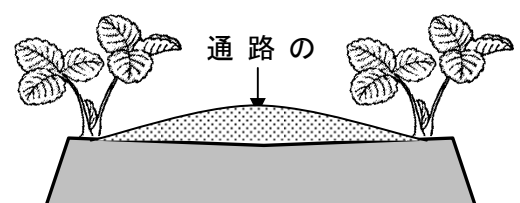
追肥・中耕・うね上げ

- ・ 生育が順調な場合、「マルチ前の追肥」までは窒素分の追肥や葉面散布は行わない。
- ・ 活着不良等で、生育が悪い場合は、液肥や葉面散布で生育促進を図る。

【追肥量の目安】

肥料名	成分率 (%)	投入量 (Kg/10a)	窒素量 (kg/10a)
新生イチゴ	6-6-4	80kg	4.8kg
あまおう専用肥料	8-6-3	60kg	4.8kg

- ・ 草勢が旺盛（10月上旬で最大葉9cm以上）で、マルチ被覆までに2番花房の分化が確認できない場合、畝上の追肥を控え、2番花房の分化後に溝肥を施用する。
- ・ 追肥施用後は、必ず中耕を行い、根張りを促進させる（追肥しない場合でも中耕は必ず行う）。
- ・ 中耕と同時に通路をさらえ、畝上をかまぼこ状に整地する。



かん水チューブの設置

- ・ かん水チューブは、うね中央部に設置し、マルチ前には散水状態を確認しておく。

マルチ被覆

- ・ 生育が旺盛な場合、2番花房の分化促進のため出蕾直前までマルチ被覆を遅くする。
- ・ 生育不良の場合は、早めにマルチ被覆し、生育促進を図る。
- ・ マルチ被覆の後は、蒸散量が多くなるため十分にかん水を行う。(チップバーン予防)
- ・ マルチの裾は、生育が旺盛な場合は畝の肩まで上げておくが、通常の生育をしている場合は、下ろしたままで生育促進を図る。

ジベレリン処理

- ・ 1番果房出蕾期に、10ppmで5cc/株の処理を行う。
- ・ 湿度が高いと処理効果が高まるため、かん水後に処理する。
- ・ 開花後に処理した果実は乱形果になる可能性があるため、開花前に処理する。

ビニル被覆と直後の温度管理

- ・ ビニル被覆は、平均気温が17℃を下回る頃か、1番果の開花時期のどちらか早い時に行う。(花に強い雨があたりと奇形果の発生が懸念されるため)
- ・ ビニル被覆後は、サイド・妻面を開放し、出来るだけ気温が上がらないようにする。
- ・ サイドや妻面は、夜間温度が10℃を下回るようになったら、閉め込みを行う。
- ・ 草勢が弱い場合、早めにビニルを被覆して、やや高めの温度管理で生育促進を図る。

【 果房の生育状況別温度管理の目安 】

頂果の状況	昼間	夜間	備考
～ 着果期	26～28℃	10℃	新葉の生育促進
着果期 ～ 白熟期	24～26℃	7～10℃	
白熟期 ～ 収穫期	20～24℃	5～7℃	収穫中は品質向上のため低めの管理

ミツバチ搬入

- ・ ミツバチの搬入は、1番果の開花1週間前を目安に行う。
- ・ 巣箱は、ハウスの外に設置し、ビニルを閉め込んだ後は巣門の前に入り口を開ける。
- ・ 寒冷紗被覆ハウスにミツバチを搬入する場合は、訪花を促すためハウス内に入れておく。

果実マット設置

- ・ 果皮は水分に弱く、傷みやすいので、果実用マットをうね上に敷く。
- ・ マットは、遅くとも頂果の開花期頃までに敷き、風等で飛ばないように固定する。

病害虫防除について

定植後の防除については、害虫は発生初期での防除、病害は発生前の予防防除が重要である。

● うどんこ病

- ・ ビニル被覆後は、湿度が高く軟弱徒長しやすいため発病しやすくなる。
- ・ 定植後からビニル被覆前後まで定期的に予防防除を行う。

● ハスモンヨトウ

- ・ 葉裏やハウスパイプ等に卵塊を産み付ける。
- ・ 発生初期の若齢幼虫時（1 cm程度）の薬剤防除が重要となる。

● オオタバコガ

- ・ 成虫（蛾）は、葉裏などに卵を1粒ずつ産み付ける。
- ・ ふ化した幼虫は蕾や果実の中に食入する特徴があるため、注意して確認する。
- ・ 発生初期の防除を徹底する。

● ハダニ類

- ・ 下葉除去、マルチ後に、薬液が葉の裏までかかるように防除する。

● スリップス

- ・ 開花中の花に成虫が飛来、産卵し、ふ化した幼虫が果実に被害を与える。
- ・ 飛来する成虫や、ふ化する幼虫の防除を徹底する。

1 散布前は必ず農薬ラベルの確認と飛散防止の徹底！

2 散布後は必ず散布器具(タンク等)の洗浄と防除履歴の記帳！